

## 入選

### あの日の太陽

東京都 鏈水中学校 2年 大竹 葵

私が中学1年生の頃のことだ。この日は部活動があり、家に帰るところだった。季節は桜が見頃を迎える時期だったが、この日はとても暑く、太陽がじりじりと照りつけていたのを覚えている。私は心の中で、なぜ春なのにこれほどまでに暑いのだとぶつぶつ文句を言いながら家路を歩いていた。

ふと視線を上げると、4、5人ほど私を同じく部活帰りの男子が前を歩いている。ふだんと違うのは、隣に60代ほどの女性が歩いていることだ。道に迷ってしまったのだろうか、男子生徒に何かをたずねているようだった。どうしたのだろうか？ 自然と歩く速度が速くなった。

近づくと、会話の内容が聞こえてきた。

「ここに行きたいのだけれど……。」

案の定、この女性は道に迷ってしまったため、この男子生徒に道をたずねているようだった。しかし、この生徒たちの対応は、こんなものだった。

「たぶんあっちの方だと思いますよー。」

「知りませんが、たぶんその道ですよー。」

これを聞き、私はあ然とした。家の近くのスーパーの場所を、知らないわけがない。なぜこんな不親切な対応しかできないのだ。私は怒りを覚えた。が、すぐには「私がいっしょに行きますよ」と声をかけることができなかった。小学生の頃ならできただろうが、最近、初対面の人に話しかけることが苦手になってしまったのだ。

それに、男子生徒がいる手前、なんだか声がかけにくい。でも、このまま放っておくわけにはいかない。今日は暑いから、熱中症になってしまうかもしれないし、なによりあの女性が困るだろう。怖い人だったらどうしよう、という不安もあったが、迷ったあげく、声をかけてみることにした。

「あの……、案内しましょうか？」

すると、私の不安はすぐに打ち消された。

「いいんですか？ ありがとう。」

そう言うと、彼女はにっこりほほえんだ。

彼女は以前、ここの地域に来たことがあったが、町の風景が変わり、迷ってしまったらしい。昔はここのあたり、全部山だったんだけどね、と照れたように笑っていた。彼女はとてもやさしく、おもしろい方で、いっしょに話していて、とても楽しかった。

しばらく歩くと、目的地のスーパーの近くの横断歩道のところまで来た。すると彼女は、花が咲いたようにふわりと笑い、こう言った。

「もうここで大丈夫。助かったわ。本当にありがとうね。」

その言葉を聞いた瞬間、どきりとした。そして、急に胸がぼかぼかあたたかくなった。たとえもしたら、今日のキラキラとした太陽ではない、春のやさしい太陽のような――。

今でも鮮明に思い出す。あの言葉にもらったぼかぼかとした感じは、なんだろう。あの日の心のあたたかさは、なんだったのだろうか。